

増補改訂

暮らしのなかの

神さん仏さん

岩井 宏實 著

慶友社



増補改訂

暮らしのな

常州の字書
藏神書

章

さん仏さん

岩井 宏實 著

慶友社



著者略歴

岩井宏實（いわい ひろみ）

一九三二年 奈良県に生まれる。

一九五八年 立命館大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了。大阪市立博物館主任学芸員、国立歴史民俗博物館教授・民俗研究部長、帝塚山大学学長、大分県立歴史博物館長を歴任。文学博士。

〔主要著書〕

『地域社会の民俗学的研究』『曲物』『絵馬』（法政大学出版局）、
『民具の博物誌』『民具の歳時記』（河出書房新社）、『環境の文化誌——地域文化の形成』『民具学の基礎』（慶友社）、『奈良大和の社会史点描』（岩田書院）ほか多数。

増補
改訂 暮らしのなかの神さん仏さん

二〇二二年九月二八日 第一刷発行

著者 岩井宏實

発行 慶友社

〒一〇一―〇〇五一

東京都千代田区神田神保町二―四八

電話 〇三―三二六一―一三六―

FAX 〇三―三二六一―一三六九

印刷・製本 亜細亜印刷

増補
改訂 暮らしのなかの神さん仏さん／目

次

まえがき……………1

年神さん……………9

大神さん……………15

八幡さん……………17

お伊勢さん……………20

祇園さん……………25

お稻荷さん……………29

天神さん……………43

恵比須さん……………46

大黒さん……………49

庚申さん……………52

竈神さん……………56

荒神さん……………58

愛宕さん・秋葉さん……………61

金山さん・金屋子神さん……………64

木地・轆轤の神さん……………67

山の神さん……………70

片足神さん……………74

太子さん……………76

ヒダル神さん……………79

袖もぎさん……………82

道祖神さん……………84

風神さん……………87

疱瘡神さん……………91

笠神さん……………94

神農さん……………97

野神さん……………100

牛神さん……………104

オシラさん……………107

ダケさん……………111

寄り神さん……………114

産神さん	117
箒神さん	119
便所神さん	121
井戸神さん	123
竜宮さん	125
船霊さん	130
宗像さん	133
住吉さん	139
金毘羅さん	145
市神さん	151
盗人神さん	154
鬼神さん	156
淡島さん	158
水使いさん	161
大手さん	163
鬼子母神さん	166

達磨さん	169
縁切りの神さん	176
文殊さん	179
聖天さん	182
お薬師さん	185
お不動さん	189
観音さん	193
馬頭観音さん	197
お地藏さん	202
七福神さん	213
日本人の祈りのかたち	223
『願懸重寶記』二編	254
現代『願懸重寶記』の世界	261
付録・現代願懸重寶記	267

世の中の動き、その周期に長短はあるにしても、好況・安泰と不況・深刻な世情が繰り返して訪れるのが、歴史の定めであるかのようにも思わせられる。それが生活者の実感であるし、また、一見安定の時代であるかのように思いつつも、よくよく考えると深刻な状況に見舞われていることもしばしばであることが歴史的現実である。

そうした現実に直面したとき、人はみな心の拠り所として、祈りを捧げて安泰の守護と御利益を得ようという切なる願いを叶えてくれる神や仏を信じる。それは記紀に語られる神々から村や町に祀られる神々、史上名だたる仏・菩薩から、路傍の神仏、時には姿の见えない神仏に祈りを捧げ、また報謝する。

歴史的に見てもそうした状況はしばしば訪れていた。雅の時代といわれた平安時代末も、実は一方で末法の時代といわれ、室町時代末も守護大名が戦争を繰り返した時代であったため、人びとの生活は混沌としていた。また近世になっても、元禄時代は大坂の豪商や富裕町人に支えられた安泰の時代であったが、文化・文政時代には江戸の繁栄という表面的安定の陰で、庶民生活は内部的深刻な状況になっていた。その風潮は大坂にまでおよんだ。

そのため、江戸・大坂においても多くの神仏が祀られ、守護・御利益を賜わることの人びとは

切に願った。そうした状況は江戸・大坂において『願懸重寶記』なる書が人びとに迎えられて評判をよんだことを如実にものがたっている。こうした状況は時代を経てまた現代、我われの身边にも見られるところである。

近代的・科学的的生活をしているとしながらも、神や仏とあらゆる機会、あらゆる場において真摯な心と態度をもつて、深くコミュニケーションを保ってきた。その神や仏はきわめて多彩な群像で、その神仏名は数えきれず、近世の『願懸重寶記』にあげられた神仏はおよびもつかないほど多彩である。それは神仏に寄せる人びとの敬虔な心情を伺わせるものである。その神仏名と祈願内容は巻末に「現代願懸重寶記」として掲げた。

近い第二次世界大戦後においても、安定と深刻な世情が幾度か繰り返されたが、そうした状況はまた、昭和三十年下期から三十二年上期にかけての『神武景気』、三十三年下期から三十六年下期にかけての『岩戸景気』、四十年から四十五年下期にかけての『いざなぎ景気』、昭和四十七年の『日本列島改造』を経て昭和五十年に入ったところから高度経済成長の歪みがもろに現れ、いわゆる表面的安定・内部的深刻の時代がひしひしと迫った。

そうした社会的状況に鑑み、昭和五十一年に『暮しの中の神さん仏さん』を文化出版局から出版したが、それから足掛十年を機に平成元年に河出書房から文庫本の体裁で刊行した。それから二十余年、今回増補改訂して体裁を改めて慶友社から世に問うことにしたので、大方のお目通しを願うところである。

増補
改訂 暮らしの中の神さん仏さん／目

次

まえがき……………1

年神さん……………9

大神さん……………15

八幡さん……………17

お伊勢さん……………20

祇園さん……………25

お稻荷さん……………29

天神さん……………43

恵比須さん……………46

大黒さん……………49

庚申さん……………52

竈神さん……………56

荒神さん……………58

愛宕さん・秋葉さん……………61

金山さん・金屋子神さん……………64

木地・轆轤の神さん……………67

山の神さん……………70

片足神さん……………74

太子さん……………76

ヒダル神さん……………79

袖もぎさん……………82

道祖神さん……………84

風神さん……………87

疱瘡神さん……………91

笠神さん……………94

神農さん……………97

野神さん……………100

牛神さん……………104

オシラさん……………107

ダケさん……………111

寄り神さん……………114

産神さん	117
箒神さん	119
便所神さん	121
井戸神さん	123
竜宮さん	125
船霊さん	130
宗像さん	133
住吉さん	139
金毘羅さん	145
市神さん	151
盗人神さん	154
鬼神さん	156
淡島さん	158
水使いさん	161
大手さん	163
鬼子母神さん	166

達磨さん	169
縁切りの神さん	176
文殊さん	179
聖天さん	182
お薬師さん	185
お不動さん	189
観音さん	193
馬頭観音さん	197
お地藏さん	202
七福神さん	213
日本人の祈りのかたち	223
『願懸重寶記』二編	254
現代『願懸重寶記』の世界	261
付録・現代願懸重寶記	267

増補
改訂 暮らしのなかの神さん仏さん

年神さん

日本においては、暦法が採用されるまでは春秋二回の季節感しかもたなかった。中国の史書『魏志倭人伝』は『魏略』の文を引用して、「其俗不知正歳四時。但記春耕秋收、以為年紀。」と記している。すなわち紀元三世紀ころの日本人は、春に耕作して秋に収穫することをもつて年数を数えていたのであった。いいかえれば、草木みな萌え芽を出す春の始めを、年の始めとしたのであった。

年賀状など新年の挨拶に「謹賀新年」とか「迎春」の詞を述べるのは、こうした古来の意識と生活慣習を伝承しているのであり、めでたいという言葉も、芽が出るⅡ「芽出度い」からきているのである。かつての正月すなわち年の始めは、今日の立春の時期であつたらしい。だからいまもその前日を節分・年越しとしており、その日は大寒の終わりの日にあたるのである。年の始め、すなわち正月に迎える年神は、穀霊たる農耕神であり、同時に祖霊たる祖先神でもある。一年のネンは稔（ネン）であるし、トシも稲（トシ）である。日本人には穀物の生命（イナダマ）と人間の生命（タマ）が渾然一体となつて観念されていた。したがって、正月は祖先を祀るときでもあつた。その祭が「年神祭」なのである。

昔は晦日から祖先の「みたままつり霊祭」が広く行われたし、今日もその風は各処に遺っている。京都・

大阪の古い商家では、最近まで厳肅に行われていた。また、奈良・大阪の農村地帯では、「正月は先祖さんが節季を見に帰ってくれる」というところもある。

年神は「年徳神」あるいは「正月さま」という親しい名で呼ばれ、

正月さん どこまでござった きりきり山の下までござった

お土産に何もつて 小豆俵に米俵

というような歌が全国におよんでいる。

正月が近づくと年神は高いところから里へ降りてきて、人びとに幸福をもたらしてくれると考えられていたのである。

門 松

暮れの八日の「事始め」に山から迎えてきた松が門松として立てられるが、今日のように表の入口の柱に一对取りつけるのは、新しい都会風である。

かつては入口の前のカドに大きな松を立て、根元に砂を円錐形に盛った。また入口の両脇にこれを二本立てて、その上に注連縄を張り渡す形式もあった。その情景は、中世末以来の洛中洛外図や、近世の風俗画に数多く描かれている。本来日本民家のカドというのは、母屋の前の庭のことで、そこは福の神がやってくる祝祭空間と考えられていた。「カドマツ」という言葉もそうし

たところからきた言葉である。

なお、門松を立てないところもある。大阪をはじめその近郊では門松を立てないのが一般的な風習で、家の中で盛大に祀るのを建前とするところもある。ここでは「拝み松」形式の年神の祭壇を設けている。また、松とは限定せずに、檜・椿・榎・栗・榊・竹などを立てる地方もある。

注 連 縄

つぎに年神祭の祭場の標示としての注連縄しめなわを縄なわねばならない。注連縄は一定の地域を区切るための目印であり、神事のさいには神聖な場所と不浄な外界とを区別するものである。したがって「標縄」とも書く。『万葉集』巻十の二三〇九に「祝部らが斎ふ社の黄葉も標縄越えて散るといふものを」とある。またこの縄は、藁を三筋・五筋・七筋と順次により放して垂らすところから「七五三縄」とも書く。

注連縄は、今日の建築儀礼の地鎮祭に見られるように、もともとは年神祭の祭場とする建物全体を長い縄で巻き巡らせるものであったが、徐々に簡略化されて玄関と祭壇ぐらいにしか張らないようになった。しかし一方で、その形状は多彩になったのである。

もっとも一般的なものに、三ないし四の基本的な形式が認められる。すなわち普通の縄のように細く長いもの、中央を太く両端を細くしたもの、ゴボウジメ（牛蒡締め）などと呼んで一方が太く、徐々に細く絞ったものなどがある。また輪飾りなどと呼び、まるめて用いるものがあるが、